

## 馬渡の眼 2

# コロナ禍における気付き

馬渡 徳子

先ず、私自身は、リスク疾患の療養中であり、大学院の調査研究対象疾患及び、監事をしている患者会も、感染症が大きなリスクとなるという現実  
に直面し、当初は正直動揺した。

年度末年度当初の時期で、しかも、諸団体の定例総会や研究会、学会シーズンでもあり、さて、どのようにこの後、事を進めていこうかと、それぞれの事由の関係者で、様々なツールで話し合いを重ねながら、一つ一つ決定していくという毎日だった。およそ、同様の方々が、そのような状況にあられたのではと、お察し致します。

スマホとパソコンに向かう時間がかなり増え、肩こりと腰痛と眼精疲労が進行し、銀行引き落とし料金も、一気に、1.6倍に。ルーターとスマホが

月途中で契約設定上限超えを、毎月更新し、涙。

医師の指示で、通院リハビリも控えることとなり、「きっちりラジオ体操」と、朝晩の「瞑想法」は、昼にも行うこととした。学校・学童と保育園に通所が叶わない孫2人を、嫁ぎ先のご両親と、分担保育していたので、瞑想中に、孫たちはそのまま昼寝してしまい、その姿に癒されたりもした。

さて、私自身は、元来「かなりの心配性である」と、自覚してはいたものの、先ずは、同居・別居の家族との、日常生活上の予防策と言行動の温度差に、最初は戸惑った。

私たち夫婦は、医療関係機関に永く勤めたことから、感染症対策に多少の知識があり、モノが無ければ無いで、

その代替え手段を、専門職に聞いて信憑性を確かめ、ちょっと一呼吸おいて行動することができるという強みがある。とりわけ連れ合いの冷静さが奏効し、私の前のめりな行動の、何度もブレーキをかけてくれた。石油ショックを体験・記憶しているの、販売店回りをするとか、慌てて買い占めするといった行動はとらなかったが、局面が大きく展開する時期の報道には、本当に大丈夫かなと、心は揺れた。

また、今年は、連れ合いが市町の自治会役職を担っていることから、上半期行事の実施有無の判断対応の連続だった。決定会議が不可能なことから、上部組織とのWebや電話での判断を受けて、監事を交えた三役での電話やWeb会議を経て、その後に班長さんに電話、メール、ファックス、手紙での広報となった。こうして、次の、一番住民に密接した作業を、各班長さんにバトンを渡すこととなっていく。

班長さんの中には、「緊急事態宣言が解除されるまで、回覧は、控えるべきでは」とのご意見を頂き、玄関に「新聞、郵便物、宅配不在通知以外は投函お断り！」との貼り紙が貼ってあったので、個人的な判断で、コンビニでコピーをして、全てビニール袋に入れて封をして、個別に投函された方もおられたと伺った。

一方で、ポストに、「郵便屋さん、新聞屋さん、宅配便さん、班長さん、お疲れ様です。ありがとう。」と貼り紙を貼っておられる家も、あったそうで、その班長をしている友人から「お年寄りって、素敵だなんて。なんか、いつの間にかギスギスしていた自分の心が恥ずかしくなった。私ら世代も、こんな風に、さりげなく、感染リスクを回避して、他人を労えるように

なりたいね。」と、メールが届いた。こういう話に出逢うと、「流石は、人生の先輩方。人間社会は、まだまだ捨てたもんでないなあ」と、嬉しくなる。

また、逆に、「回覧板として、回すからこそ、地域住民間での見守りができるのでは」とのご意見も頂き、確かに、玄関先に留まってしまっている回覧板は、安否確認の貴重なサインだし、回る順番のルールが上手くいかなくなっていると、認知機能低下等のサインにもなり、班長から民生委員を通して地域包括支援センターにつなぎ、個別支援につながっていたなど、改めて、「回覧板のもつ価値・役割」を確認できた。

こうした「アナログな伝達手段のもつ地域社会での歴史的価値と役割」を、今一度確認し合い、状況の変化と伝達すべき事由の緊急性等に応じて、「多様化した伝達手段のプラス面」も活かしつつ、一方で「自治会で歴史的に受け継がれたしくみの有効性」についても、自治会が主体的に合議で選択し、次世代につないでいく機会にもなったと思う。

「情報(化)社会」における自身の情報の収集と処理能力の癖や特徴をも、率直に振り返らざるを得なかった。

発信される情報の信憑性や妥当性、信頼性、有効性を判断する力が、改めて、問われているなど反省し、真摯に研究姿勢にも、活かさなければと自戒した。